

2020上智大学・ベネッセ 英語教育シンポジウム

これからどのような 英語教育が求められるか

田中茂範

PEN言語教育サービス代表

慶應義塾大学名誉教授

0. 対話の世紀

アナン(Kofi Annan) 前国連事務総長

「21世紀は対話の世紀である」

Pluralism: a key challenge of the 21st century (2013, in Ottawa)

- ✓ **“If diversity is seen as a source of strength, societies can become healthier, more stable and prosperous.”**
- ✓ **“We have to promote dialogue to combat fear, intolerance and extremism.”**

異なるもの

異なるもの、

すなわち「違い」とどう向き合うかということが

グローバル社会における重要課題である。

違いの両義性

多様性 \rightarrow 豊かさ

違いは個性の源泉であり、多様性を生み出す。

違い \rightarrow 諸問題の原因

違いは偏見の原因であり、差別を生み出す

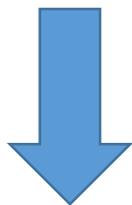
コトバの力

問題解決(違いと向き合うため)のメディア

- カネ(money): 経済(支援)
- チカラ(power): 政治(圧力)
- コトバ(word): 対話、合意形成

コミュニケーションの力

「利害関心や思惑が対立する中で
その対立を乗り越えるために
コミュニケーションのチャンネルを絶えず開き
コミュニケーションを実践するしかない」



「21世紀は対話の世紀である」に込められた思い

個人に求められる資質

■たくましさ(自立[independence]・自律[autonomy])

自分で考え、判断し、行動するという自立(律)性

☐→自己表現力

■しなやかさ(柔軟性[flexible, resilient])

異質の他者との共生のためには、自らの意味空間を変えていくしなやかさが必要

☐→対話力

Most spoken languages

英語 15億人（3.7億人が母語話者）

中国語 11億人（9.8億人が母語話者）

ヒンドウー語 6.5億人

スペイン語 4.2億人

フランス語 3.7億人

アラビア語 3億人

ロシア語 2.7億人

グローバル社会における言語は
英語である

[Source: Statista 2017現在の推定]

「新しい時代」とはどんな時代？

グローバル時代

多文化共生時代

主体性と多様性

グローバルイシューズ

(SDGs、感染症の

拡大、覇権争いなど)と

と合意形成

英語教育の力点

新しいテクノロジーの時代

高度情報化

バイオデザイン

AIロボット

流通改革

貨幣改革

ハッキング・サイバー戦争

連帯が求められる今

分断 対立 閉鎖
連帯が求められる

連帯はコミュニケーションを通して
可能となる

確かなる英語力が求められる

確かな英語力を身につける

教科書、問題集、そしてテストの中に

英語があるのではなく、

生徒一人一人の中に息づく

英語力 -- My English (個人に帰属する英語力)

を育てる

1. 英語力のモデル

Native Speaker Model (Adaptation Model)

Proficient-Language User Model (Accommodation Model)

Native Speaker Model

◆ Native Speaker Model:

Adaptation Model: Cultural Norms

Second Language Acquisition

Initial State

Interlanguage

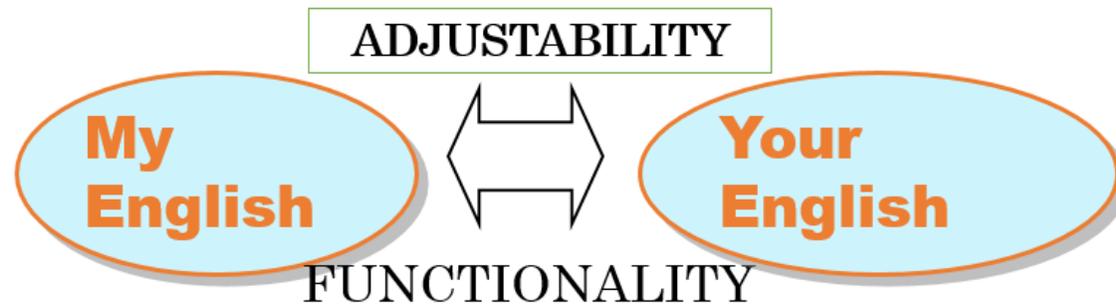
Target State



Proficient Language User Model (The CEFR)

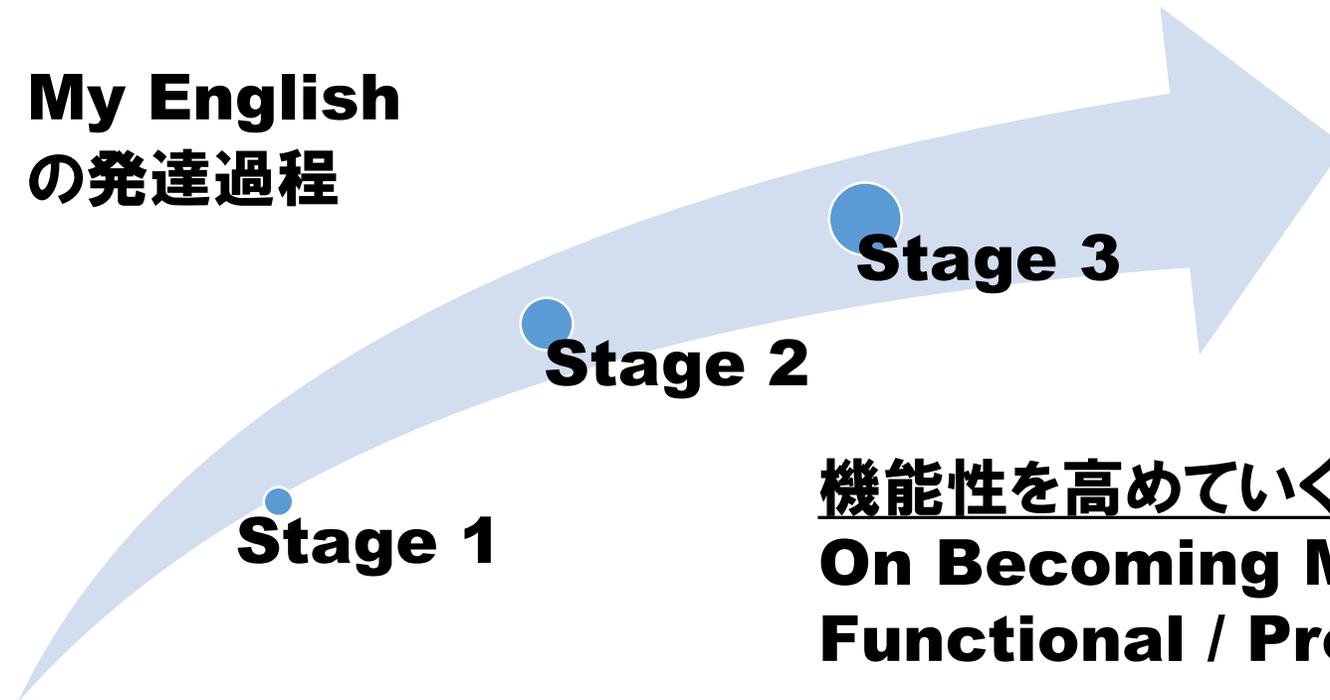
❖ Proficient Language User Model

Accommodation Model: Situational Norms



second language development: SLA \rightarrow SLD

**My English
の発達過程**



2. 英語力の定義

Communicative Competence

Communicative Language Competence

分類型から相互作用型に

Canale & Swain, 1980, 1983

- 「**文法能力(grammatical competence)**」
- 「**社会言語的能力(sociolinguistic competence)**」
- 「**方略的能力(strategic competence)**」
- 「**談話構成能力(discourse competence)**」(1983年に追加)

Bachman, 1990

Language Competence

● Organization Competence

Grammatical Competence (vocabulary, syntax, etc.)

Textual Competence (Cohesion, Rhetorical Organization)

● Pragmatic Competence

Illocutionary Competence (Ideational Function, Heuristic Function, etc.)

Sociolinguistic Competence (Dialect, Register, etc.)

The CEFR 2001



言語的能力の下位項目

Linguistic Competencies

Lexical competence

Grammatical competence

Semantic competence

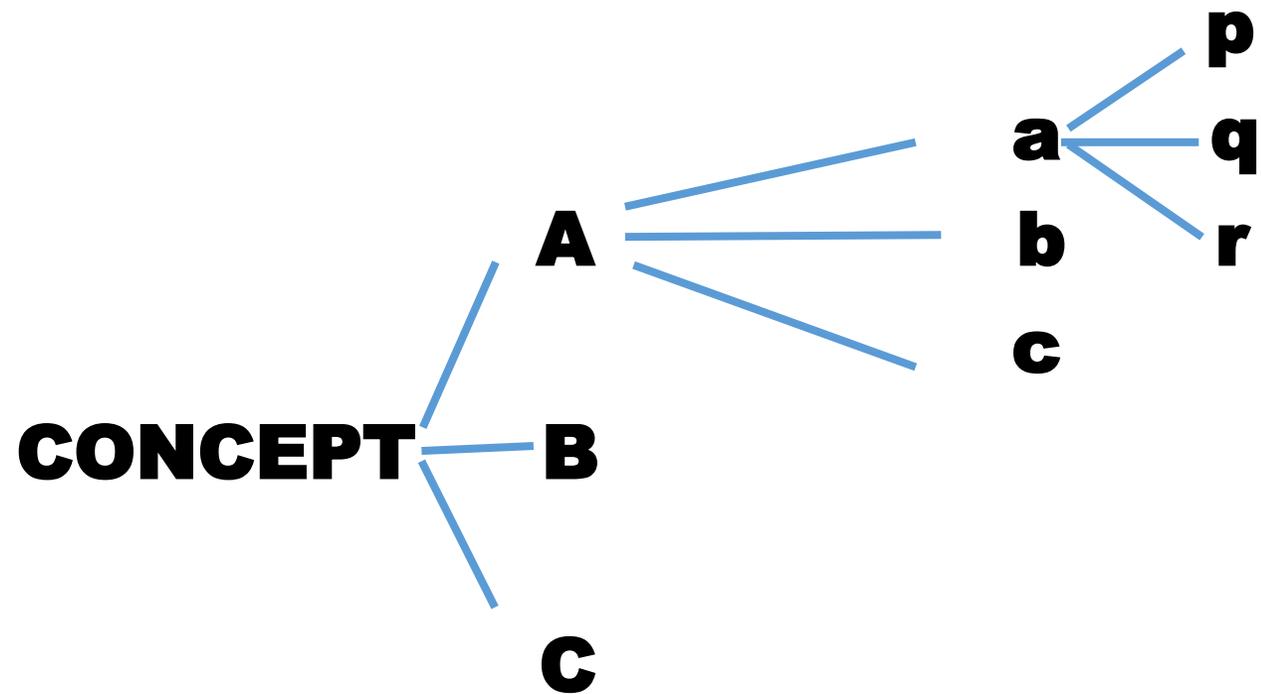
Phonological competence

Orthographic competence

Orthoepic Competence

orthoepy=the study of the pronunciation of words

分類的記述方法: タクソノミー



分類的定義の問題

Taxonomic Nature –

“The taxonomic nature of the Framework inevitably means trying to handle the great complexity of human language by breaking language competence down into separate components. This confronts us with psychological and pedagogical problems of some depth. Communication calls upon the whole human being. The competences separated and classified ... interact in complex ways in the development of each unique human personality.”

これが肝心

英語力とは何か (ECF)



My English= 個人の英語力

My English (個人の中に息づく英語)

Task-Handling Competences

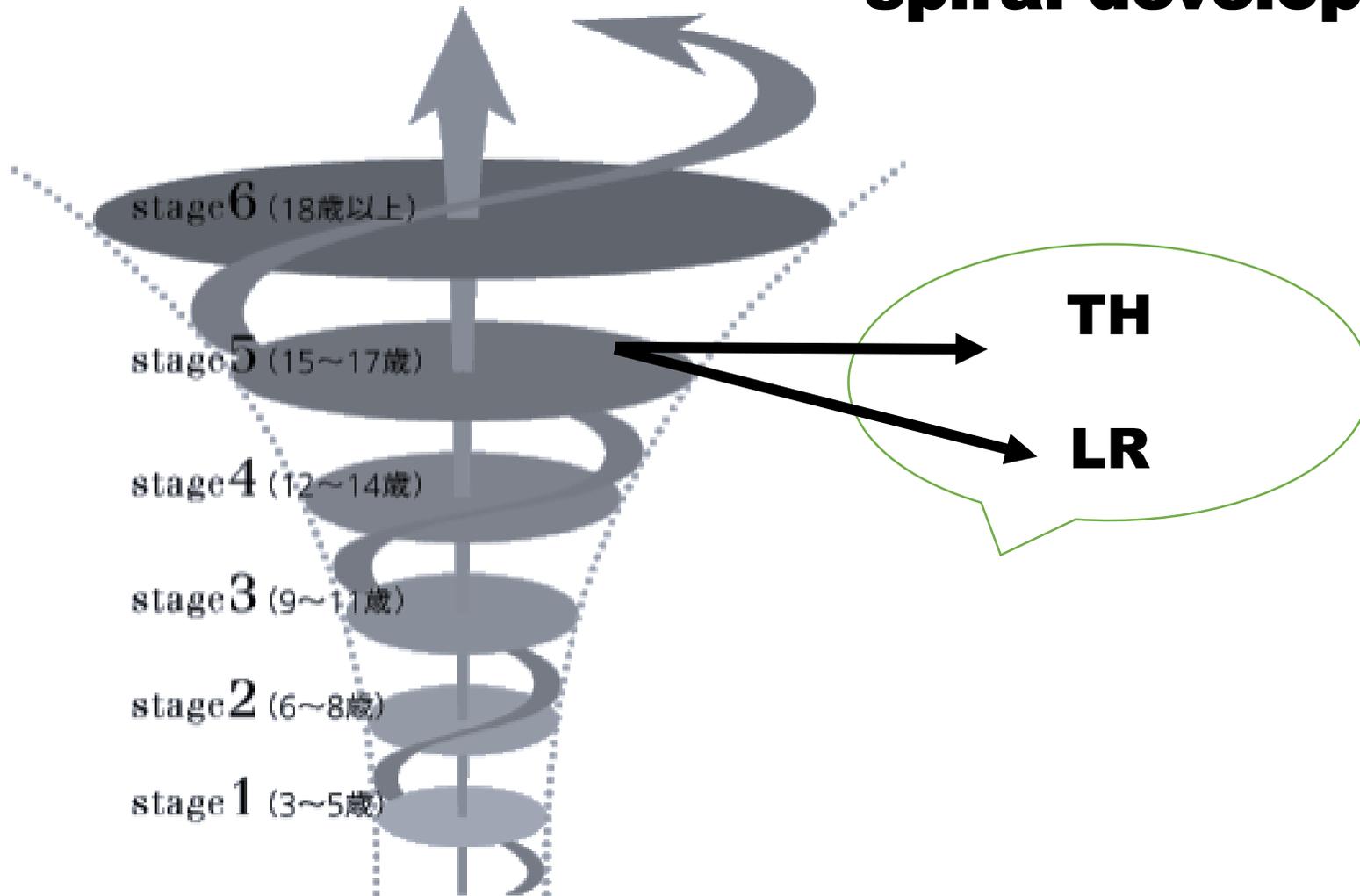
Language Resources (Linguistic Repertoire)

新しい定義の意義

- (1) 幼児から成人まで一貫した英語教育カリキュラム
編成する際の視点を与える。**
- (2) タスクハンドリング力と言語リソース力を高めることが英語教育の
目標であることを明示化。**

第二言語の発達の観点

spiral developmental progress



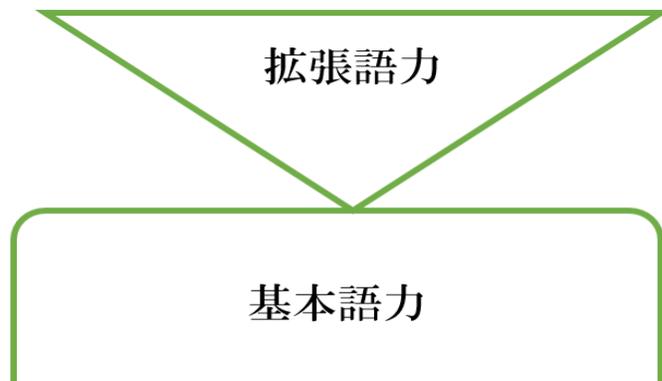
Language Resources

語彙力 **基本語力と拡張語力**

文法力 **チャンクの形成とチャンキング: free expressions**

慣用表現力 **表現の型: formulaic expressions**

語彙力



基本語を使い分け、使い切る力

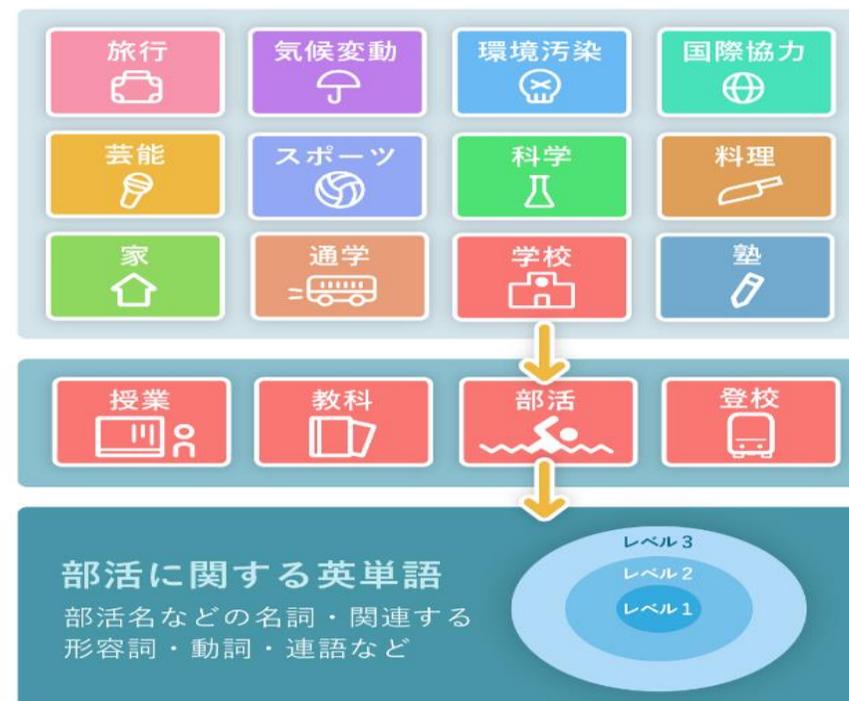
基本語（基本動詞、前置詞、基本名詞、基本形容詞、接続詞、代名詞など300語程度）

《コア・ドメイン》
基本動詞はエンジン

前置詞はハンドル

句動詞はタイヤ

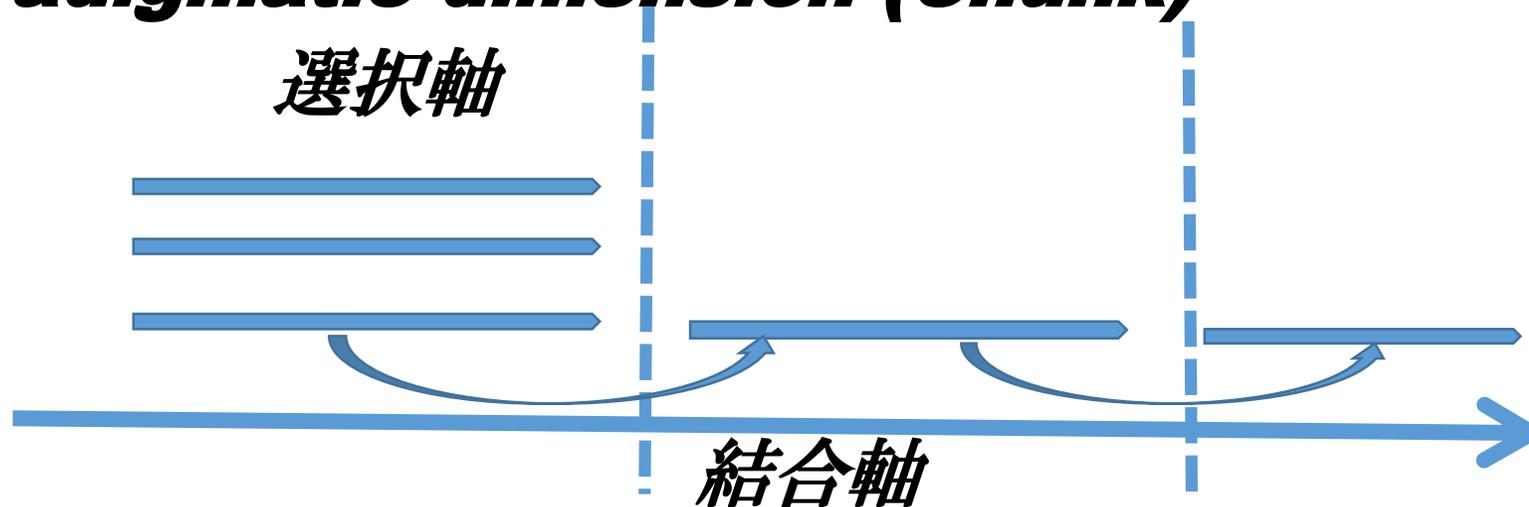
語彙領域マップ（日常・社会編）



文法力と言語の2つの軸 (F. de Saussure)

Paradigmatic dimension (Chunk)

選択軸



結合軸

Syntagmatic dimension
Chunking

自由表現と慣用表現

イエスペルセン

(**Otto Jespersen [1860-1943]**)

言語には慣習と創造の2つの側面がある

慣用：“**formulas**”

認知言語学

創造：“**free expressions**”

生成言語学

自由表現と慣用表現が言語の両輪

慣用表現の機能

- ①慣用表現は効率よくある思いを表現するのに最適である(**expressive optimization**)
- ②慣用表現は英語表現の組み立てを容易にする(**constructional easiness**)
- ③慣用表現は表現の流れを自己調整する働きをする(**discourse navigation**)
- ④慣用表現の連鎖がプレゼンだとかチエアリングといったスキルになる(**formulaic chaining**)

この4つができることが慣用表現力である。

タスクと タスクハンドリング・スキル

- タスクは無数に存在し、個々のタスクをリストしても英語を学ぶ際にはその場限り(アドホック)なものになってしまう。
- タスクより少し抽象度を上げて、タスクを行うのに求められるタスクハンドリング・スキルに注目することが必要。
- スキルはある程度鍛えることができる。
- 無数のタスクの背後にあるスキルにはどういうものがあるか。

タスクハンドリング・スキル

- 事物描写力 (show & tell など)
- 概念説明力 (「塾」「義理」など)
- 発表力 (speech, presentation など)
- 比較記述力 (優劣、長短)
- 物語展開力 (朝起きての出来事: 記述と意見 (コメント))
- 対話力 (ディスカッション、ディベート)
- 交渉力 (説得、妥協、提案)
- 議事進行力 (会議、シンポジウム)
- 会話管理能力 (応答、発問、割り込み、話題変更)

事物描写力

事物描写力とは、何か事物について説明する際のスキル

- 「タイプ(種類)で語る」
- 「直訳する、由来を説明する」
- 「比較する」
- 「用途や使い方を説明する」
- 「素材や形状を説明する」

例えば「ラムネ」について説明を求められたとする。目の前にラムネの実物はない。

2

- ・タイプ:**Ramune is a type of soft drink in a bottle.**
- ・由来:**Ramune comes from“lemonade.”**
- ・形状:**In the bottle, a small glass ball is placed at the top of the bottle.**
- ・用途・働き:**It’s a lid. To drink, push the ball down hard with your thumb into the bottle.**

事物描写力の型として応用力がある。

タスクと目的

タスクには

狙い(目的)がある:**purposeful act**

表現モード自体には目的はない

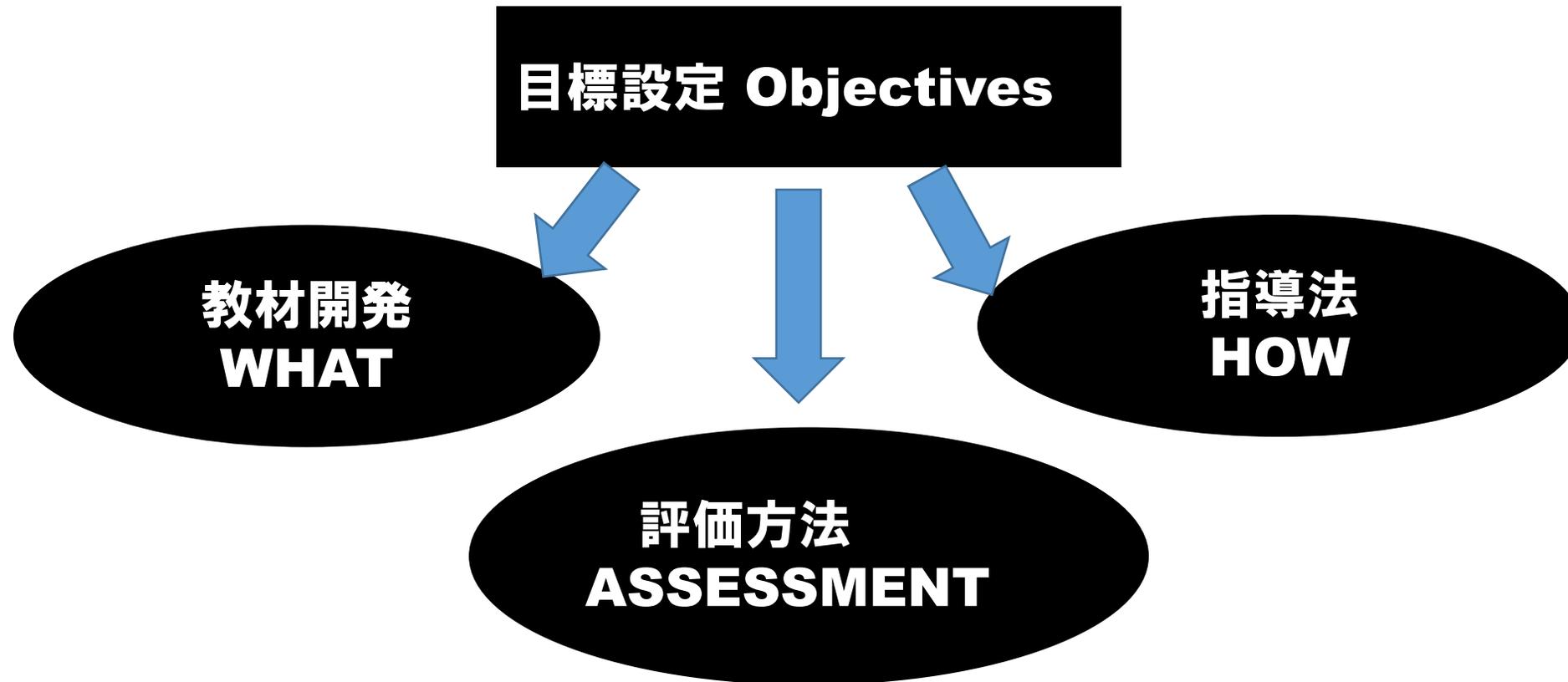
声を使って表現する

文字を使って表現する

例.「speaking テスト」ではなく「speaking task テスト」であることを自覚する。「listeningテスト」ではなく、「listeningタスクテスト」であることを自覚する。

3. 英語力を身につけるための 英語教育のあり方

一貫性・整合性



目標

どういうタスクをどれだけ機能的にどういった
言語リソースを使ってハンドリングできるか？

Task-HandlingとLanguage Resourcesが鍵

教材論

以下をカバーする教材開発が必要

✓ **Language Resourcesの内実化**

語彙力 文法力 慣用表現力

✓ **Task Handling力の向上**

Speaking Task Handling Writing Task Handling

Listening Task Handling Reading Task Handling

Multi-modal Task Handling

指導法

❖3 Ways

Task-Handling力

Task-based Teaching

言語リソース力

Language-based Teaching

音声表現力

Orality-based Teaching

Task-Based Teaching

タスク(課題)を学習単位とする;プロジェクトを通した総合的な英語

タスクとは、自己紹介する、グラフを使って温暖化の影響を説明する、フレンチと中華を比較して両者の魅力を説明するなどの課題のことを言う。

プロジェクト学習とは「リサーチ」「プレゼンテーション」「ディスカッション」の3つの相互作用を通して、生徒たちが主体的に関わる活動のことを言う。

註:LRもタスクの中で内実化を図る

Language-Based Teaching

言語リソースの内実化：単語力、文法力、慣用表現力を育てる
方法論

・コア理論

・ネットワーク理論

・チャンキング理論

目標：確かな語彙力(基本語力と拡張語力)の育成；表現のための確かな英文法力、慣用表現力の育成

Orality-based Teaching

音声重視の英語：音声表現力を鍛える手法

**耳慣れ、口慣れ、手慣れを総合化した身体知としての英語
リスニング&スピーキングのデュアルモード ラーニング**

目標：瞬発力を高める、音声で表現する力を育てる

評価論の開発

Task-Handling (Can Do) / LR (Can Say) の整備
目指すべき目標: 発達のステージ

- **学習者の視点[達成目標]、教師の視点[指導目標]、評価者[テスト開発者]の視点[テスト開発目標]**

おわりに

教師と生徒の役割

学習者であると同時に表現者に

「いつか、どこかで」ではなく「いま、ここで」

Learning by Doingの実践

語学教師であると同時に場づくりのためのプロデューサーに

白けない場の創出